

## 平安文学における「蕭蕭暗雨打窓聲」の受容について

閻, 紹婕  
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1498252>

---

出版情報 : 中国文学論集. 43, pp.185-194, 2014-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 平安文学における「蕭蕭暗雨打窓聲」の受容について

閻 紹 婕

## はじめに

『狭衣物語』に、野分めいて、秋風が荒々しく吹いて、窓を打つ雨の音も何か恐ろしく聞こえる宵のうちに、狭衣の君が雨に濡れ人目を忍んで飛鳥井の女君の許へやってきたという場面がある(新全集 卷一 一二二頁)<sup>[1]</sup>。ここに見える「窓打つ雨」という言葉は、『新編日本古典文学全集』(小学館)及び『平安後期物語引歌索引』(新典社 一九九一年)において、白居易の漢詩「上陽白髮人」の一句である「蕭蕭暗雨打窓聲」が典拠として指摘されている。白居易による漢詩集『白氏文集』が平安物語へ及ぼした影響の甚大さは言うまでもないと思われるが、『源氏物語』の中には特に『白氏文集』を典拠とした箇所が多く見られる。そして、その『源氏物語』の強い影響下に成立した『狭衣物語』にも、『白氏文集』から受容したとみられる箇所が散見される。右に述べた「窓打つ雨」は『源氏物語』においても用いられており、同様に『白氏文集』が典拠として指摘されている。ただし、『源氏物語』と『狭衣物語』とは、漢詩の受容態度が異なるようである。『源氏物語』では原漢詩と共通した場面に漢詩を典拠とする表現を用いるのに対し、『狭衣物語』では原漢詩の場面とは乖離した場面で用いられており、単なる修辞として用いていると考えられるのである。現代の漢詩文受容研究が、典拠そのものの追求に力が注がれる傾向にあるのに対して、稿者は、受容する側の物語において、典拠と言われたものがどのように機能しているかを究明することが重要であると考ええる。

平安文学における「蕭蕭暗雨打窓聲」の受容について

本稿では、『狭衣物語』だけでなく、中古の漢詩、物語、日記及び和歌に複数の使用が認められる「蕭蕭暗雨打窓聲」という一句を典拠とする表現に注目して考察を進めていく。その際、まず中国文学において「雨打窓聲」がどのような場面で用いられているのかを確認する。その上で、日本文学においてどのような場面に用いられ、またどのような役割を担ったのかを観察し、その受容態度の変遷を明らかにしたい。

一 漢詩文における「蕭蕭暗雨打窓聲」

「蕭蕭暗雨打窓聲」の表現を含む『白氏文集』「上陽白髮人」(卷三 〇一三二)は、「新樂府五十首」に属し、唐・元和四年(八〇九)作、この詩は天子の寵愛を期待して後宮に入った美女が、楊貴妃にいらまれて上陽宮にとじこめられ、結婚もできずに空しく一生を過ごした悲哀を詠じている。白居易の自注には「愍怨曠也」とあって、配偶者を得られない悲しみを哀れむということである。以下は「上陽白髮人」の一部分である。

(前略)

秋夜長

夜長無寐天不明

耿耿殘燈背壁影

蕭蕭暗雨打窓聲

春日遲

日遲獨坐天難暮

宮鶯百轉愁厭聞

梁燕雙栖老休妬

(後略)

秋夜長し

夜長く寐ぬる無く天明けず

耿耿たる殘燈壁に背けたる影

蕭蕭たる暗雨窓を打つ声

春日遅し

日遅くして独坐すれば天暮れ難し

宮鶯百轉すれども愁へて聞くを厭ひ

梁燕双栖すれども老いては妬むを休む

上陽人の憂鬱な日々が秋夜の「殘燈」「暗雨」、春日の「天難暮」「宮鶯厭聞」によって具体的に描写される。その中

で「耿耿殘燈背壁影、蕭蕭暗雨打窻聲」は秋の夜長に眠れず、悲しみにうちひしがれていることを表現している。感情が移入され、照射され、浸み込んでいるからこそ、「風」「雨」「燈」ですら「殘」であり「暗」になるのである。「殘燈」、「暗雨」は景物についての言葉であるだけでなく、また、感情についての言葉でもあるのだ。

また、白居易の『和微之詩二十三首 和自勸二首・其二』(卷五二 二二六七)は、妻と杯を交わしながら、歲月の逝くこと早きを嘆き、この半月間に四人の旧友がなくなつたことを悼むという詩である。この漢詩中の「微酣靜坐未能眠、風霰蕭蕭打窻紙」では、夜静坐をして眠りにつけず、風が蕭蕭として「窻紙」を吹き付けるといふ場面が描かれる。風が「窻紙」を打つ音は詩人の心の悲しさを強調している。さらに、白居易の友人元稹は、左遷され失意のどん底で、白居易の江州司馬左遷を耳にした時、「垂死病中驚坐起、暗風吹雨入寒窻」(『聞樂天授江州司馬』四五八六)と詠んだ。この一句は、元稹の反応とその時の情景が描かれたものである。

『全唐詩』において、雨、風、雪などが窻を打つ場面を描写した用例は約十例が見られる。宋詩においてはおよそ三十例が見られた。宋詩に雨が窻を打つ例を示すと、陸游の「打窻風雨正三更」(『三月二十七日夜醉中作』)、「豈惟半夜雨打窻」(『初冬風雨驟寒作短歌』)、「三更急雨打窻破」(『即事』)、「蘇軾の「臥聽蕭蕭雨打窻」(『書雙竹湛師房二首・其二』)が挙げられる。唐宋の漢詩において全用例の三分の二以上の用例で、「雨打窻聲」といふ場面は苦境に立たされた場面で詠われていることが確認できた。以上のことから、中国文学において雨が窻を打つという場面は、苦境に立たされた場面で詠われるという特徴が指摘できる。

日本においては、『千載佳句』(松平文庫本)「天象部 雨夜 二八五」に「耿耿殘燈背壁影、蕭蕭暗雨打窻聲」が『和漢朗詠集』「卷上 秋夜 二二三」に「秋夜長、夜長無寐天不明、耿耿殘燈背壁影、蕭蕭暗雨打窻聲」が確認できる。中の「雨打窻聲」といふ表現が宮女が秋の夜長なかなか寝付けないう様子を描写した所で、一人寝のわびしさを表わすために用いられている。この部分は平安人において人口に膾炙したものである。『本朝無題詩』(『新典社注釈叢書』新典社)「卷五」においても、藤原茂明によるとされる「暗雨打窻天未曙、孤灯背壁曉猶殘」(『冬夜言志』三三三)という詩に、詩人の悲しみを表す表現として用いられている。

二「蕭蕭暗雨打窓聲」の『源氏物語』への受容

『源氏物語』においては、「蕭蕭暗雨打窓聲」という一句は次のように引用されている。

五月雨はいとどながめ暮らしたまふより外のことなくさうさうしきに：（中略）：おどろおどろしう降りくる雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、源氏「窓を打つ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。

（新全集 幻卷 五三九頁）

右の場面は紫の上を亡くして一周忌も近づいた頃、折しも五月雨の頃で、さつと吹き付ける風で灯籠の灯が揺れて消えそうになり、空がまっくらになる時で、光源氏が紫の上のいないことに対して感じている寂しさ・悲しさを「上陽白髮人」の「蕭蕭暗雨打窓聲」の一句を詠誦して、それは紫の上に聞かせたい声である、と源氏のやもめ暮らしの状況に合わせた描写がされている。光源氏が自らを女である上陽白髮人に重ねている。ここでは、宮殿に閉じ込められたまま空しく年老いてゆく宮女の孤独な姿が心情的に光源氏と通ずる点が多く、原詩の蕭々と雨の降る秋夜を『源氏物語』では風まじりの五月雨の夜の寂しさに置き換えている。つまり、「上陽白髮人」の内容を理解してこそ、物語の背景や上陽白髮人と光源氏に共通する心情を思い描くことができ、より深く内容を読み取ることができるのである。

ところで、『源氏物語』への『白氏文集』の影響について先行研究を見渡したところ、その影響関係には、訓点資料で確認できる漢文訓読が大きな役割を果たしていることが確認でき、漢文を平仮名で読み下すという紫式部の創作手法が指摘されている。築島裕氏は以下のように論じておられる。おそらく紫式部自筆の原本では、訓読語的要素をも他の一般の和文と同じく、平仮名で書き下したのであろう。その際、作者の意識の中には、この単語この文脈は、漢文訓読調であるという自覚があったことと思われる。例えば「螢のいと多う飛びかふも、夕殿に螢飛んで」と、例の古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり」（幻卷）の例は『長恨歌』の「夕殿螢飛思悄然、秋燈挑盡未成眠」から受容したとされている。

夕一殿に螢を飛ば思、悄一然たり、秋燈の、桃を、盡て未だ能く眠らず。(大東急記念文庫本卷十二 286行)

バ行四段動詞である「飛ぶ」の連用形が助詞「て」に連なつて撥音便化する例は、『源氏物語』ではほかに存在しないと考えられ、訓読語がそのまま用いられた例と考えられるとする。<sup>(3)</sup>

この場面は、訓読文を直接引用することによつて読者に玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋や玄宗皇帝が悲しみに暮れる場面を連想させ、光源氏の悲しみを読者の胸に訴える効果を狙っている。

「上陽白髮人」の旧抄本を見ると、神田本『白氏文集』<sup>(6)</sup>卷三には以下のようにある。

耿々レ残の灯の背に壁影、蕭々レ暗雨の打窓を聲。

神田本『白氏文集』の該当箇所は「打窓ヲ聲」であり、それに従つて訓読するなら、「窓を打聲」になる。先に挙げた『源氏物語』の用例を見ると、「窓を打つ声など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも」であり、「窓を打声」と一致し、窓に助詞「を」が付いている。

また、書陵部蔵藤原時賢筆『白氏文集』卷三（正中二年点）の該当箇所は、次のようになっている。

秋の夜長シ、夜長シ無ク睡こと、天不そ明。

耿タル々タル残の燈の背に壁影、蕭タル々タル暗暗雨の打打窓を聲。(上陽白髮人 154)

『源氏物語』の該当用例「窓を打つ声」の「を」は、時賢本の朱点（菅原家訓）「を」と一致している。また、後世訓にもゆれが見られないため、これが後世の一般訓とされる。格助詞「ヲ」は漢文訓読においては省略せず、付訓を常とするため、これは漢文訓読的であるといえる。この点は宇都宮睦男氏が既に指摘している。<sup>(7)</sup> また、宇都宮

平安文学における「蕭蕭暗雨打窓聲」の受容について

氏の考察によれば、『源氏物語』における『白氏文集』を受容した用例が、時賢本の菅原家訓と一致し、後世の一般訓とも一致するのである。

「窓」という語はすでに『万葉集』に用例を見るが、「雨打窓声」という類の意味は古く日本にはなかったであろう。鈴木日出男氏は、「窓という語自体、本来は漢語であり、歌語としては必ずしも伝統的でない。日本の家屋の実際からしても、これは漢詩的な用語である」と指摘する<sup>(8)</sup>。日本上代の住居形態に鑑みるに、雨が打ち付ける窓が当時日本に存在したとは考えにくく、「雨打窓声」という表現を日本独自に生み出したとは考えにくいと思われる。

### 三 「蕭蕭暗雨打窓聲」の和歌への受容

前述のごとく「上陽白髮人」は、上陽宮に閉じ込められた宮女の悲哀と苦悩を語る詩であり、日本の後宮で生活する女性が共感できる内容を持っているため、人口に膾炙した詩句である。和歌の世界においても、「蕭蕭暗雨打窓聲」の撮取は行われている。例えば『和泉式部日記』においても以下の用例が見られる。

五月五日になりぬ。雨なほやまず。一日の御返りのつねよりももの思ひたるさまなりしを、あはれとおぼし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、<sup>(宮)</sup>「今宵の雨の音は、おどろおどろしかりつるを」などのたまはせれば、

<sup>(女)</sup>「夜もすがらなにごとをか思ひつる窓うつ雨の音を聞きつつ

かげにゐながらあやしきまでなむ」と聞こえさせれば、なほ言ふかひなくはあらずかしとおぼして、御返り、<sup>(宮)</sup>われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと

(新全集 二九頁)

雨夜に逢瀬を果たせない二人を描く場面である。宮から「今宵の雨の」云々と雨にこと寄せての文が届いた。それに対して女は、宮の訪れもなく雨音を聞く我が身を、上陽白髮人が「窓を打つ雨」を聞く姿に重ね、宮に「夜もすがら」と返歌している。逢瀬を果たせないのは雨のせいばかりではなく、身分の違う相手との恋愛に対する宮の乳

母からの諫言のせいでもあった。女が自らを上陽白髮人に擬え、寵愛を絶たれた女が悲哀に震える雨の夜を過こしたという意味で詠んだ歌である。上陽白髮人に自らを擬えることよって、恋の危機感を増幅させる効果がある。この歌と上陽白髮人との関わりについては、古く岸本由豆流の『和泉式部集標注』に指摘がある。『和泉式部日記』において、上陽白髮人のように忘れ去られた女のイメージを強調することは、このまま二人の仲が絶えてしまう可能性を強調することでもあるわけである。

右に示した「よもすがら」の歌は、漢字・仮名表記の違いを除いて異文はない。内容から見ると、「よもすがら」は古今集以来、歌語としての用例が多い。「窓打つ雨」という表現は、「秋ころ、あめのよひと夜ふるをききてなげきつつ秋のよすがらまどろまでまどうつあめのおとをきくかな」(『肥後集』九三番)の如き用例もあるが、「文集の蕭蕭暗雨打窓声といふ心をよめる 大式高遠 こひしくはゆめにも人をみるべきをまどうつあめに心をさましつつ」(『後拾遺和歌集』雑三 一〇一五番)のように、『白氏文集』「上陽白髮人」のありようをなぞり、思いやつたものとして機能している。

和歌において「窓打つ雨」という場面がどのように用いられているのかを調査してみると、詩人の「悲しみ」や「愁い」を表す際に、よく使われている。また、訓読語的特徴が消えて、完全に和文らしくなった。さらに、典拠とされる漢詩の「上陽白髮人」の描写は秋であるため、日本において、「蕭蕭暗雨打窓声」という一句は『和漢朗詠集』や『千載佳句』の秋部に属し、「窓打つ雨」という言葉は殆ど秋を描写する時に使われている。それに対し、中国の漢詩においては秋だけでなく、春雨・風・冬雪が窓に吹き込んできた場面も数多く見られる。例えば張泌の「春雨打窓、驚夢覺來天氣曉」(『酒泉子』)のような用例がある。

#### 四 「蕭蕭暗雨打窓聲」の『狭衣物語』への受容

さて、冒頭に述べたように『狭衣物語』においてもこの「上陽白髮人」の例を引用した例が確認できる。

野分だちて、風いと荒らかに、窓打つ雨ももの恐ろしう聞こゆる宵の粉れに、例の忍びておはしたり。いつ

平安文学における「蕭蕭暗雨打窓聲」の受容について



もなよなよとやつれなし給へるに、いとど雨にさへいたうそぼちて、隠れなき御匂ひばかりは、ところせきま  
 でくゆり満ちたるを、隣々には、あやしがるもをかしかりけり。

(新全集 卷一 一一一頁)

これは野分の夜の邂逅を描いた場面で、野分だけでなく、「窓打つ雨」までが降り、狭衣と飛鳥井女君の恋を揺るがすものの比喩となっている。季節は明確ではないが、後の乳母が女君を連れ出す場面で、女君が「変らじと言ひし  
 椎柴待ち見ばや常盤の森にあきや見ゆると」という和歌を詠じて、秋の気配が見られるため、この「窓打つ雨」の  
 場面も秋であろう。

『狭衣物語』の「蕭蕭暗雨打窓聲」の引用は、「上陽白髮人」にみたような年老いた宮女が夜雨の音を聞きながら  
 寝ることができない、そういつたわびしさを象徴するような意味合いを含まず、ただ夜に雨が降っているというこ  
 とをさす。「上陽白髮人」のように一人寝で寂しくて、二人が遠く隔たっているという状況ではなく、光源氏のように  
 に死別したわけでもなく、これから二人の逢瀬が語られる。死別した恋人を思う場面で用いられる『源氏物語』や  
 逢えない状況で用いられる『和泉式部日記』とは正反対とも言える場面に用いられているのである。『狭衣物語』の  
 諸伝本同士を比較してみても、「窓打つ雨」に異同は見られない。

しかし、「窓打つ雨」という表現そのものが、当時の人々にとって恋の悲しい行方を想わせる表現となっているの  
 であって、この時点ですでにこれからの悲しみや愁いが暗示されていると言える。その悲しみが具体的にどのよう  
 なものであるかは、今はまだもちろん明言できない。しかし、これから狭衣と飛鳥井に起こる悲劇を暗示させるも  
 のであることは確かである。

この野分を冒して飛鳥井のもとに通うという場面が描かれた後、次は狭衣が飛鳥井を夢に見て、不安に思う場面  
 が描かれた。あいにく重い物忌でどうしようもない。これに先立ち狭衣の乳母子道成は父の赴任を機会に、以前に  
 見初めた飛鳥井を筑紫に同伴しようとして乳母と二人で画策することがあって、乳母は土忌を口実に飛鳥井を連れ  
 出し、筑紫行きの船に乗せる。結局飛鳥井は道成の求愛を拒み続け、虫明の瀬戸で入水しようとする。

## 終わりに

以上から分かるように、「蕭蕭暗雨打窓聲」は夜の黒々とした風が、雨を交えて寒々しく窓に吹き当たるという情景を描写して、悲しい思いを引き立てる役割をしている。

『源氏物語』においては、光源氏が目の前の光景やその場の心境を表すために、記憶の中にある漢詩の表現を借りて、口ずさんだのである。原典としての漢詩と完璧に合致しているとは言えないが、意味にせよ、雰囲気になせよ、原詩のもつものをほとんど損なっていない。『源氏物語』が『白氏文集』をこれほど正確に、また自由に利用したことを考えると、『白氏文集』で読み取ることがができる内容を背景として物語が展開し、漢籍とは『源氏物語』の心を支える大きな原動力だといえるべきであろう。

このような『源氏物語』の「上陽白髮人」引用は、『白氏文集』を当時の読み手が理解していることを前提として物語を構成したと思われる。直接訓読文を記載したことは、当時これらの漢詩文が読み下されており、且つ、訓読文の一部のみを引用して全体を想起させる表現効果は、読み手が「上陽白髮人」を読み下して読んでいたことによつて保証される。

『狭衣物語』の漢詩文受容は、白居易詩の原義に即したのではなく、原詩の宮女の孤独・凄寥の心情をまったく無視しており、原詩の雨風の激しさを描写する字面のみを使って、忍んで来たことを読者に感じさせる。『源氏物語』のような物語の骨格にふれるまでの受容態度と違って、表現として用いるに止まっている。

しかし、表面的に修辞として用いているだけであるが、一方で悲しい雰囲気を引き立たせるという働きをしていて、後の悲劇を暗示するものとなっている。つまり、原漢詩文の場面を巧みに変容させ、物語を盛り上げる効果をもたらすための苦心の跡が見て取れる。そしてこのことは、当時「蕭蕭暗雨打窓聲」という漢文表現が、すでに和文化的にいたことも関連すると思われる。

今後は、以上の考察結果を踏まえながら、本稿ではまだ触れていない『狭衣物語』の漢詩文受容の例を分析し、更に詳しく作者の意図と引用の技法を考察したい。

注

- (1) 本稿において『狭衣物語』及び以下の『和泉式部日記』、『源氏物語』と『和漢朗詠集』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、巻名と所出頁を付した。傍線は引用者による。
- (2) 「新楽府五十首」には、その冒頭に、白居易による詳細な序文が付されている。その中で彼はこれらの詩歌が儒家の伝統である『詩経』に基づき、文飾のためではなく、国家のために綴られたものであることを主張している。その末尾には「唐元和四年左拾遺白居易作」と自身の官名を付して署名している。作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店 一九六〇年）による。
- (3) テキストの引用は下定雅弘・神鷹徳治編『那波本白氏文集・宮内庁所蔵』（勉誠出版 二〇一二年）による。読み下しは稿者による。
- (4) この詩はテキストによつて幾つかの文字の異同が見られる。本稿における唐詩の引用は、基本的に『全唐詩』（中華書局）をテキストとして論を進めることとしたい。番号も『全唐詩』によつて付した。また、宋詩の引用は元智大学宋詩検索データベースによる。
- (5) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会 一九六三年）による。
- (6) 太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』（勉誠社 一九八二年）による。神田本を書写した人は、藤原茂明（当初の名は知明）である。その書写の日時は、卷三末尾に付された奥書によつて「嘉承二年（一一〇七）五月五日未時」と判明する。また、本文を書写した後、改めて「訓点」を書き入れる作業が行われたが、その時も「天永四年（一一一三）三月二十八日の晡時」雨降る中に完了したことが記されている。
- (7) 宇都宮睦男『白氏文集訓点の研究』第三章（溪水社 一九八四年）による。また、上例の「背タル」の「タル」の右肩に朱合点、「蕭々タル」の「タル」の右肩に朱合点、左肩に黄合点、「ヨルノ」の右肩に朱合点がある。
- (8) 鈴木日出男『古代和歌史論』東京大学出版会 一九九〇年）による。
- (9) 本稿において和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）により、歌番号を付した。